
水分過多な物語

夜刀鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水分過多な物語

【NZコード】

N4452L

【作者名】

夜刀鶴

【あらすじ】

森の中で、記憶喪失となつて倒れていたマナ。

偶々通りかかったメイフィアと、村で医者をしていたレティスによつて、命は助かつたが、思い出せるのは名前と知識だけ。

果たしてマナは何者なのか？マナは記憶を取り戻せるのか？はたまた、メイフィアの着せ替え人形となってしまうのか？

相変わらず妙な意味でチートっぽい主人公が織り成す。微妙奇妙な物語。よろしければご覧下さい。

Arcadiaにおいて投稿中です。ついでにタイトル名変更し

ました。

第1話 行き倒れの記憶喪失（前書き）

結構ご都合主義交じりかもしません。

後、主人公はチートです。その辺りが苦手な方はご注意ください。

第1話 行き倒れの記憶喪失

酷い、耳鳴りがする。体中で酷い悪寒がする。

意味が解らない。まぶたも、体も、酷く重くてだるい。

「う～…………あ～～…………」

我慢できずに呻き声を出す。声がかされているわけでは無いらしいが、だるくてうめき声以外出せそうに無い。

少しづつ体に力を込めて、動かしてみる。…………ほとんど動かないが、激しい痛みなどは感じない。

感覚が麻痺しているのか、あるいは単に体が冷え切っているだけなのか…………どうせよ、今の状態が危険である事には変わりないと想ひ。

今度はまぶたに力を込め、何とか辺りの景色を目に映す。

周囲は薄暗く、草や木が生い茂っているのが見える。…………恐らくは、ここは森の中なのだろう。

何とか呼吸を繰り返しながら、現状を考える。

恐らく、今のボクは体中が麻痺していて、身動きが取れない。助けを呼ぶにも声は小さいし、と言つかうめき声しか出そうに無い。場所は恐らくどこかの森の中。少なくとも、倒れていて安全な場所ではなさそうだ。

この状況でボクが打てる手は……助けを待つか、体の回復を待つか。

体が冷えてて麻痺している事を考えれば、待つても麻痺から

回復することは多分無いと思つ。

そうなると、かなりの運任せになる。恐らくこのままだと、待つてゐる結末は餓死か凍死か狼辺りの餌だらう。その中ではまだ、凍死が一番マシ、かな？

「え？ あれ？ …… 人？ ねえ君、大丈夫？」

そんな事を考えていたら、誰かの声が聞こえて来た。存外、ボクは運に恵まれているらしい。

「うわあ…… 可愛い お人形さんみたい。えっと、拉致監禁しちゃつて良いのかな？」

……訂正。ボクはあまり運には恵まれていないようだ。

助からないよりはマシ、とか思えるかもしねないけど、行き倒れを見て拉致監禁つて…… 下手すると、『死んだ方がマシ』な目に合わされそうなんだけだ。

「えっと、周りには私しか居ない…… よね？」

いや、ボクが居るから。もつとも、ボクは拉致対象なのでカウントされていないだけだと思つけど。

「う…… ら、らぢ…… しな……」

このままだとマジで拉致られそうなので、何とか口を開いて抗議をする。

「ふえー？ …… お、おねーさん、何も聞こえなかつたかなー」

ちょっ

「うふふふふ、私専用の着せ替え人形ゲット～って、冷たつ！？」

「うぶつ」

余程ボクの体が冷たかったのか、一度ボクを抱え上げたあと、そのまま地面に落とす誘拐犯。

「あわわわ……」、「めんなさい」次はちゃんと抱えるから

そう言って、今度はしっかりと抱える誘拐犯。ああ、拉致されるのだとわかつても、人肌が暖かい……。

「えへへ、抵抗しないってことは、お持ち帰りしても良いくことだよね？」

お嬢さん。それは本人に、抵抗する力がある場合のみ適用される言い訳でしょうが。

再度抗議のために口を開こうとするが、その前に暖かみを得た体が眠気を催してくる。

まづいなあ……と思いつつも、圧倒的な眠気には抗い切れず、ボクはそのまま意識を失っていった。

チヨンチヨン。と小鳥の鳴く声が聞こえる。

つつすらと目を開けると、朝日が差してきている。なるほど、これが有名な朝チヨンと言つものか。

……何かを盛大に間違てるような気がするが、気にせずにひくりと目を開ける。まぶたが非常に重いのは、まだ眠り足りないと言う事なのだろうか。

「……知らない天井だ」

ネタの好機は逃さない。とか、むづかから何を考えてるんだろ？
？ボクは。

先ほどから頭を掠める良くな分からぬ衝動に首をかしげながら、ベッドから体を起こして辺りを見回す。

「しくしく……」

なにやら床に、巨大な蓑虫らしき物体が転がつてた。え？ 何これ怖い。

「だして～、誰か出して～」

もぞもぞと動きながら、鼻声で嘆き声を上げる蓑虫。一応、人語は話せるらしい？

じゃ無くて、何か人がロープでぐるぐる巻きにされてるのか、これ。これは新手の放置プレイ？いや、相手を泣かせるのはマナー違反でしょ。

助けてあげようかな？とは思つものの、手足は非常にだるくて動きたくない。寒気やら何やらは大分収まつてゐるけど、多分まだ体力が戻つて無いんだと思つ。

「ほんの出来心だったんですよ、だから出して下さい」

出来心つて、一体どれほどの事をしでかせば、こんな事になるのやら……。

そんな事を考へていると、部屋の扉が開き、中に入つてきた。

「ええ加減少しさは反省しよつたか？つと、そつちも起きたんやな」

入つてきたのは、赤髪短髪の女の子。……つて、ひょつとしてこの女の子がこの蓑虫さんを作つた張本人？

「え？あの子、田を覚ましたの？」

「うわああんま氣味悪い動き方すんなや」

「そ、そんな事言つたつて、大体私を縛つたのはレティスちゃんじやない」

うねうねと動いて、こちらに頭を向ける蓑虫さん。確かに気持ち悪い……つてそうじやなくて。

「えと、貴方方が助けてくれたのですか？」

「ん、そやで」

「私が村まで運んだのよー？えつへん」

「どうやう」の二人は、私の恩人で間違いないようだ。

「助けていただき、ありがとうございました。えっと、その……それで、そちらの方は、何故縛られてるのです？」

それならば、出来ればその蓑虫状態は開放してあげたいと思う。と言つたが、恩人が床に転がつて自分がベッドに寝てるとか、凄く心苦しいわけで。

「ああ、この阿呆はあなたの寝込みを襲おうとしたからな」

「そ、そんな事しないわよ。ただ単に、服を脱がそうとしただけじゃない」

……ええつと、好意的に見れば寝苦しそうだつたから……とか？

「これだけ可愛いんだから、少しごらい裸が見たくなつて脱がそうとしたつて、不可抗力でしょ？ね？ね？」

「悪いけど、その理屈が通るんはあんただけや。この阿呆が」

うん、無理。さすがにそれは擁護できない。つていうか、したくない。

そういえば、氣を失う直前は拉致監禁とか言つてたな」と思いつつ、蓑虫さんに軽く冷たい視線を向けてみる。あ、何か青褪めた。

「あわ、あう、その、『』『』めんなさい」

「はあ……そらまあ、普通そんな事言つとねば嫌われるわな」

「え、ええ～～……や、嫌われちゃったの？私」

なにやら悲痛な声を上げる糞虫さん。……やれやれ。まあ、命の恩人である事は違いないわけだし。

「はあ、まあ良いですよ。ボクの命を救ってくれた事には変わりないのですし」

ボクのその言葉に、糞虫さんの表情がぱあっと明るくなる。

「本物ー～あいがと～～～～！」

そして、狂喜乱舞の変わらぬうねうねと動く糞虫さん。……何かキモイ。

「キモッ あんま蠢くなやーーーの虫っーーー！」

「酷いッーーー！」

「ま、冗談はさておいて。」シリシリで皿口紹介しつつやないか

蓑虫さんの繩を解き、仕切りなおす赤髪の女の子。

「「ひの名前はレティスや。これでも、この村の医者をやつとんねんで」

「私の名前はメイフィア。村のお姉さん役をやつてるのよ?」

「村の足手まとこの間違いやる」

「ひどい」

笑いながら、漫才のよつな挨拶をする一人。赤髪短髪の背が低めな女の子がレティスさんで、桃髪長髪の女人がメイフィアさんね、覚えた。

「それで、あんたの名前を教えてくれへんか?」

「うん。ボクの名前は……」

……アレ?

名前……ボクの、名前は……。

「……ん?つて、ちよつ、大丈夫なんか?」

あ、たまが。痛……割れる、よつこつ……。

「え?え?」

「無理したらあかん。わかつせ」

「ぐつう……だ、だいじょうぶ」

一瞬、一際大きな痛みが走って、その後痛みが引いていく。そのせいなのかそのお陰なのか、名前は何とか思い出す事が出来た。

「ボクの名前は、マナ、です。でも……」

でも、それ以外の事が、

全然、思い出せない、よ?

第2話 現状把握

チヨンチヨン。と小鳥の鳴く声が聞こえてくる。

ついつらと目を開けると、部屋に朝日が差してきてる。どうやら朝になつたようだ。

「しらな……つて、昨日見た天井だし」

天井ネタを天井とはこれいかに。とか、また朝チヨンか。とか、良く分からぬネタが思い浮かぶ。

そもそも、朝チヨンは相手が居なければ成り立たないはずだし。たとえばこんな風に、横にメイフィアさんが寝ているとか……。

……オイ。

「んにゅふふふ……マナちゃん」

何でいきなり、ボクの寝てるベッドにもぐつこんでんすか。このロングピンクは。しかもボクに抱きついてきてるし。

昨日寝たときは、確か違うベッドにいるか違う部屋だったはずなのに……一体こいつの間にでもぐつこんだのやう。

とりあえず、このままでは体を起こす事も出来ないので、何とか引き離す事にする。が、相当強く力を込めてるのか、ボクを抱え込んだまま動く様子が無い。

命を救つてもらった手前、あまり邪険にはしたくないけど、さすがにこのままつて言つわけにも行かない。とりあえず揺さぶつてみる。

「ふにゃあ？ ンンン……」

一瞬目を覚ましたか？と思つたが、依然眠りこけたまま起きる様子が見えない。

「メイフィアさん。朝なのですよ～？」

再度ゆさゆせと揺らしながら声をかけるも、全然起きる様子が無い。それどころか、

「んふふふ、マナちゃんひば可愛い～」

「むぐつーー？」

ボクの頭に腕を回して、胸に押し付けてくる始末。……ちょっと、息苦しいんだけど。

「む～むむむ～ーー！」

「ん～、マナちゃん、くすぐつたいよ～」

……このロングピンク、本当は起きてるんじゃないか？だとすると、ボクに無いモノを押し付けるこの行為は、ボクに対する嫌がらせ？

「ンンンンン……」

くつ、ここまで来ると本当に嫌がらせのよつとも思えるけど、この人のことだから恐らく天然な気がする。それは昨日の一日だけで

十分思い知らされたし。

……もつとも、昨日のアレが擬態なら、また話は変わるのだけど。

「むにゃあ、お姉さんは頼りになるでしょ~」

いや、ありえないから。昨夜張り切つて料理を作ろうとして、とてつもない惨状を築き上げた事は、鮮明に記憶に残ってるから。

レティスさん曰く、メイフィアさんはあらゆる家事において、やる気はあるけど一向に上達せず、破壊と混沌を撒き散らす壊滅的家事能力者なのだそうだ。

初めは、いくらなんでもそれは言いすぎなのでは?と思つてはいたのだけど……得体の知れない物体を製造しながら、調理器具やらを破壊していく様を見る限り、言ひすぎとも言えない氣はする。

まあ、それはともかくとしても、昨日拾つてきたばっかりの記憶喪失の不審人物を抱き枕にする時点で、あまり『頼り』にするべきではないと思う。まあ、その不審人物相手に言つているのだから、それはそれで複雑なのだが……。

「むう」

これで熟睡してるのだから、本人は何らかの理由でボクを信頼しているのだろうけど。なんだかなあ……と思ひながら、ボクはメイフィアさんが起きるまでメイフィアさんを揺さぶり続けていった。

結局、レティスさんが来るまでメイフィアさんが起きる事は無く、メイフィアさんはレティスさんの力カト落としによつて、文字通り

叩き起された事になつたわけだが。

「読み書きなんかは、一通り出来る見たいやな。それに、結構いろんな知識ももつとるようやし。記憶喪失って聞ことのナビ、その辺りはどうなつてるん?」

朝食を取り終え、ボクの現状をある程度把握した後、レティスさんはそう切り出してきた。

ちなみにメイフィアさんは、ボクを膝の上に乗せてボクの髪の毛を弄つている。

「ええっと、言い方が難しいのですが、知識は残つてゐるけど思い出のよつなものが消えている……とこつ感じですね」

「?」

首を傾げるレティスさんに、ボクは田の前に置かれていたペンを手に取る。

「たとえば、これが物を書くための道具で、『ペン』と書かれてる前で

ある事は覚えています。そして、このペンを作るための材料や、どんなペンが書き易いかということまで覚えていています

正直、材料から作り方まで頭に浮かぶとは思わなかつたけど……記憶を失う前のボクつて、一体何やつてたんだろ？

「ただ、このペンの作り方を教えてくれた人とか、どのような経緯でこのペンと言うものを見つたのか？とか、そういうことが一切思い出せないのですよ」

要約すれば、昨日以前にボクが何をしてきたのかを全て忘れた、と言つ事なんだけど。

「なるほどなあ……」

「正直、ボクの事は自分でも怪しいと思つています。なので、ここに置いて欲しい、などとは言いません」

具体的にどれくらい怪しいかって、自分の知識の中に、飛行機や自動車といった、明らかにこの世界ではオーバーテクノロジーな……異世界の知識が紛れ込んでいる事。

その知識を何処で得たのかが不明瞭な割りに、その知識が異世界の知識であると何となく確信してゐる辺り、不思議な話ではあるけど。今のボクは自分からその知識を漏らすつもりはあまり無いけど、記憶を失う前はどうだったか分からぬ。下手をすると、ボクを追いかけてくる人が居る可能性もある。

幸いな事に、ボクの知識の中にはサバイバルの知識もあつたりするから、ここを出てもすぐに野垂れ死になんて事は無いはずだ。既に一度行き倒れになつてゐる時点で、その知識が役に立つのかは

ちゅうと不安だけ。

「だから、今日こでも」」」を

「あ～……何か勘違にしとるみたいやな

ボクの言葉をさえざるよりひに、レイディスさんが告げる。

「うちは何も、マナをこに置いていたらあかんなんで言つてへんで?」

「え? でも

「それに、怪しいからうちはこんな幼い子をほつぼつ出したが、うちが後ろ指をわれるつちゅつ話や」

「う、それは……」

メイフィアさんがボクを拾つてきたことは、既にメイフィアさん経由で村人達に知れ渡つているらしい。

さらに、ボクは傍目からは10歳にも満たない女の子に見えるらしく、確かにそんな子供を放り出したら何かと問題になるかもしれない。

実際の年齢は、知識量から考えると100は超えてそうなんだけど……。

「何より、うちが何と言おうとも、メイフィアがマナを手放すとは到底思えん? マナは、どつか行く当てとかあれへんのやろ? マナが一人で野宿とか、認めるわけあれへんやろ」

「当たり前よつー」こんな可愛い子を外の冷たい風にさらすなんて、考えただけでも恐ろしいつ

「あ～……まあ、そんな訳でな。実際のとこ、マナには選択肢なんかあらへんのや」

「……何とも、お人よしな人たちだと思つ。だつて、少なくとも、

「でも、ボクを拾つても、貴方達に得する事なんて無いのに……」

ある程度知識はあると言つても、ボクはどうやら見た目相応の体力しかないらしい。得体の知れない子供である事を考えれば、そのまま置いておくと言つ選択なんてありえないはずだ。

「はあ……何言つてんねや。あんたみたいな子供が、そんな事言つもんぢやうで？」

いや、レティスさんにはあまり言われたく無いような……レティスさんって、多分1-3か1-4くらいの女の子だよね？

と言つて、この年齢で医者つて言つのも凄いような気がするんだけど、この村ではそれが当たり前なのかな？あまり、突っ込みは入れないほうが良いか。

「うちは達がええつちゅつとるんやから、居つたらええねん。大船に乗つたつもりで、難しい事は全部うちで任せときごーー！」

そういつて自分の胸をドンッと叩くレティスさん。

「私も、頼りにして良いのよー？」

「メイフィアは泥舟やんか。うかつに乗つたら、沈んでもうがな」

「ひ、酷い。そんな事無いわよ。私だって立派な大船よ？」

タイタニックですね。解ります。

……いつなつてしまつたら、しようとしないと思ひ。いつこう人たちは、きっと今の状況でどれだけ拒絶しても、押し通していくのだから。

だつたら……それなうば、せめて。

「解りました。なら、せめて何かお仕事をさせてください」

少しごらこは、役に立たせて欲しいと思ひ。

いや、別にCREENと呼ばれたくないからつて言ひ理由では、ないですよ?ホントデスヨ?

「えへ、マナちゃんはお姉さんのそばに居てくれるだけで良こので、ついでに、いろんな服をえ着てくれれば」
いや、それだとマジでCREENになつちゃう。

「それはダメですよ。ボクだって、家事ぐらこなら少しあは出来るんですから。あと、着せ替え人形は勘弁して欲しいのですよ」

「ん~、せやつたら、今日からでも家事の手伝いしてくれへんか?」

ボクの提案にレイイスさんが乗つてくれたので、話をそのまま進める。

「はい。まだ体調が完全に回復したわけではないので、無理は出来ませんが……」

「無理をしるとはいわへんよ。つちひは医者やし、その辺りは信用してくれてええで」

うん、大丈夫そうだ。問題はボクの知識にある家事の方法が、ちゃんと通用するものなのだけど……それは追々と言つが、家事自体はやつた事あるわけだから、道具が違つても慣れる事は出来るはず。

「はい。それじゃあ今日から、よろしくお願ひします」

「いやあ……助かるわ。メイフィアは家事もだけへんし、いつそメイドでも雇おうかと思つとつたぐらいこやからなあ

「メイドー?」

メイフィアさんが、メイドと書いた葉に過剰反応する。……何か、嫌な予感がするんだけど?

「ふ、ふふ、うふふふふ。そつね、そつよね。何で気付かなかつたのかしら、私。マナちゃんが家事を手伝つて事は、つまりはメイドさんになるつて事なのよ!?」

「いや、その理由はおかしくないです」

「『ノルマ』も無黙やで、幾分」

「ボクのジッパリを無視して、メイフィアさんがさうにパートマッチする。

「つまらそなは、マナちゃんはメイド服を着なければいけないって
事はわからぬ。」

「だからノルマの理由は……って、速ツー？」

「ああこつときだけは、妙に動きが良くなるよな……不思議ゆつ
べきか、性質悪いゆづきかは迷うといひやが」

「いや、と言つて止めて欲しかつたなど。被書来るのは間違になく
いひだして、原因は多分レティスさんなんだかい。

「の後、ジッパリからとも無くメイド服を調達してきたメイフィアさ
んひと悶着あつたが、結局は押し切られ、ボクはそのメイド服を
着る事になつてしまつた。

「可愛い女の子なんだから、ひやんと着飾るべやよつ

まあ、ボロ布をずっと着ていろよつまシなんだだけビ。

「瞬、こんな可愛い子が女の子のまは無い……と言つ、謎の言

葉が頭をよぎる。「」ういつたネタが頭に浮かぶたびに、一体誰がこんな言葉をボクに教えて来たんだろうか?と言つ疑問がわくのだが……。

折角頭に思い浮かんだわけだしと、[冗談交じり]にメイフィアさんに聞いてみる。さすがにコレは、軽く[冗談]で返していくと思つし。

「もし、ボクが男の子だったらどうする気だったのです?」

「男の娘……?そ、それはそれで……むしろソレで……!」

メイフィアさんの目と表情は、何処からどう見ても本気と書いてマジと読む状態です。本当にありがとうございました。

……ええ、理解しましたよ。きっとこの人はダメな人なんだと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4452/>

水分過多な物語

2010年10月8日15時17分発行